

# 時代の葉

TOKI NO SHIORI



## 「窓ぎわのトットちゃん」 黒柳徹子 1981年刊

◀学校教育のあり方

# 効率や競争より 大事なことは

東京・JR国立駅からほど近い国立音楽大学付属幼稚園。園庭には小川を巡らせ、メダカを飼うなど自然に触れる機会を大切にしている。

「はじめにリズムありき」初代園長・小林宗作が好んだこの言葉を園は大切に守り続けてきた。「自然の中にリズムがあるという教え。効率的に育つことがよしとされる時代にあつて、ゆつくりでもいい、一人ひとりの子どもリズムを大切に保育をしていくかを確認するのです」と小林宗作こそ「窓ぎわのトットちゃん」の舞台であるトモ工学園の校長先生だ。

「トットちゃん」こと俳優・タレントの黒柳徹子さん(87)は「校長先生に出会っていな

かったら今の私はいなかった」と常々語っている。私立トモ工学園は戦時中、東京・自由が丘にあつた。児童約50人、教室は古い電車の車両、時間割がない一風変わった小学校だった。そこへ、公立小学校を退学させられたトットちゃんが入学してくるところからお話は始まる。

かつて読んだ印象は、みんなとどこか違う型破りな女の子が優しい先生やお友達に出会って成長する愉快な物語だ



黒柳徹子さん(川柳太郎)



窓ぎわのトットちゃん

窓ぎわのトットちゃん(講談社)

朝日新聞は家庭面で連載を構え、戦後最大級のベストセラーの背景を掘り下げた。児童学の専門家は「今の教育は勝つ者と負ける者を選ぶ競争原理のうえに成り立っていて息苦しい。だからこそ、『トットちゃん』の自由な世界にあこがれ、みずみずしい子どもらしさにひかれたのでしょ」と分析した。

日本女子大学の清水陸美教授(学校臨床学)は当時の状況について、高校進学率が70年代半ばに9割を超え、80年代は世界が新自由主義に包まれて競争に向かっていた時代だと説明する。詰め込み教育の反省からゆとり教育が導入されたものの、いじめや不



いわさきちひろ「猫とランドセルをしょった子ども」1969年(『窓ぎわのトットちゃん』の挿絵から)



トモ工学園の「電車の教室」の授業風景。学園は1937年に創設され、45年に空襲で焼失した(『小林宗作抄伝』から)

## 自由な校風が育んだ2人の感覚

ちひろ美術館常任顧問

松本猛さん(70)



『窓ぎわのトットちゃん』に、母いわさきちひろの絵があまりにもびっぴりなので、よく文章に合わせてうちのおふくろが絵を描いたと思われ方がいるのですが、そうではありません。ちひろが55歳で急逝した折に、「いつか会える」と思っていたのに……と黒柳

さんからお手紙をいただきました。ちひろのファンで、心の中に最初からイメージがあつたようです。その後、絵を借りたいと言われて、9500点の遺作の中から一緒に選んだのです。四十数年前の話ですが、印象深い日々でしたのでよく覚えていま

「窓ぎわのトットちゃん」の連載が月刊誌「若い女性」で始まり、黒柳さんは「ザ・ベストテン」という夜の歌番組が終わってから、自分で車を運転して東京都練馬区の美術館に來られました。挿絵選びはいつも深夜で、美術館の事務室で原稿を書いていたこと

もありました。猫のいる絵を気に入って使いたいからと、「原稿は大だけれど、猫にも会ったから」と、原稿を書き換えたこともありました。実はちひろが通った東京府立第六高等女学校も、トモ工学園のような自由な校風だったんですよ。きれいなものが好きで、モノがな

い時代にも、麦わら帽子にリボンを付けておしゃれを楽しんだ。そういう感覚が黒柳さんと重なって

「トットちゃん」は海外でも人気だ。特に中国語版は1450万部に達している。北京の版元の陳明俊社長(51)は上海の師範大学在学中に読み、ぜひ中国で紹介したいと後に翻訳出版の許諾を得た。2003年の出版当初は反応があまりよくなかったが、この10年は児童書部門でずっと1位。「中国にも大学受験競争や心の成長を軽んじる風潮があつて、教育に悩む親や先生は多い」と言う。

(久田貴志子)

◇次回は『路上観察学入門』の予定です。